

「越のかおり」栽培ごよみ（平成22年度暫定版）

「越のかおり」品種特性

1 アミロース含有率が高く製麺に適する	3 稲姿は「キヌヒカリ」並み 初期生育は良好で葉幅は広く葉色はやや淡い × 穂数は「コシヒカリ」よりもやや少ない偏穂重型	5 耐病性はやや弱い × 穂いもち抵抗性は「やや弱」 × 紋枯病が発生しやすい
2 耐倒伏性に優れる 稈長は「キヌヒカリ」並み 耐倒伏性は「やや強」 × 極端な多肥条件では倒伏の可能性もあり	4 脱粒しにくく胴割粒が問題とならないため立毛乾燥が可能 × 穂発芽性「やや易」で、倒伏させると容易に穂発芽する	6 収量性は「コシヒカリ」並み 7 玄米品質は腹白発生多く「中の下」

目標収量	600kg/10a
穂数	360本/m ²
1穂籾数	82粒
m ² 当り籾数	30,000粒
登熟歩合	85%
千粒重	23.5g

栽培のポイント

- (1)適地 ~ 標高100m以下の平坦地とし、捨て作りは絶対にしない
- (2)育苗 ~ フラ及び籾殻は育苗ハウス内外に絶対に放置しない
種子は3年間は自家採種し、4年目に更新する
浸種は、食用米と分けて行い、種子の混入を防止する
充実種子の選別のため、塩水選は必ず行う
- (3)移植 ~ 混種防止のため、主食用米の移植後に移植する
穂数確保のため、栽植株数は60株/坪(4本/株)とする
- (4)基肥 ~ 基肥窒素量は4~5kg/10a程度とする
大豆跡作では原則基肥無施用とする
- (5)追肥 ~ 穂肥は出穂25日前、14日前の2回に分施する
窒素量は2回の合計で3kg/10a程度とする
出穂期の葉色が急激に低下した場合は穂揃期追肥を行う
- (6)水管理 ~ 移植後は保温的水管理で早期有効茎確保
移植1か月後を目途に中干しを実施する
中干し後は飽水管理を継続する
落水は出穂25日後以降とする
- (7)病虫害 防除 ~ 葉いもち予防のために箱粒剤または本田施用予防剤の散布は必ず実施する
斑点米の混入は製品品質を下げるのでカメムシ防除は適正に実施する
紋枯病の発生が見られたら、発生程度に応じて穂揃期までに防除を実施する
- (8)除草 ~ 移植後の初中期一発剤を基本とする
- (9)収穫・調製 ~ 出穂50日後頃をめやすとする
篩い目は1.8mm(M網)以上とする

月	3月	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月	
日	25	10	20	10	20	10	20	10	20	10	20	10	20	10	20

時期別管理	塩水選・種子消毒 (浸種は食用米と分ける)	わら籾殻をハウス周辺に放置しない		いもち剤箱施用	耕代 かき 植	除草剤散布 (どちらかを必ず実施)	いもち粒剤散布	幼穂形成期	穂肥	穂肥	出穂期	穂揃期追肥	落水期	成熟期	収穫
		葉いもち、紋枯病の発生が見られたら薬剤防除を実施													

草丈	(cm)	51	61	67	74	84	93	86(稈長)
茎数	(m ² 当り茎数)	72(4本植え)	570	520	465	440	410	380

施肥基準	基肥のめやす (kg/10a)			生育量のめやす				追肥のめやす				備考 穂揃期追肥は出穂期葉色が褪めた場合にのみ施用判断
	窒素	リン酸	カリ	田植え8週間後				1回目		2回目		
	4~5	4~5	4~5	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)	時期	施用窒素量	時期	施用窒素量	
				61	520	11	36	穂肥	7月10~15日	1.5kg/10a	7月20~25日	
								穂揃期追肥	8月10~15日	1kg/10a		

水管理	活着促進	飽水管理を継続(フェーン時は湛水)	落水は出穂25日後以降
	浅水で分けつ促進	中干し	